

日本経済学会 2007 年春季大会 (大阪学院大学)

6 月 3 日 (日) 午後の部 14:30-16:30

セッション名: 環境実証

わが国稲作生産性の伸びはゼロとなるか？

ー 総合生産性, 技術変化およびキャッチ・アップ効果の計測を通じて ー

山本康貴・近藤功庸*・笹木 潤**

(北海道大学大学院農学研究院, *旭川大学経済学部, **東京農業大学生物産業学部)

[報告要旨]

1990 年代以降, 「緑の革命」のポテンシャル枯渇などにより, アジアにおける稲作生産性が停滞しつつある動向に危惧を示す指摘が多くなってきた(菊地[2005], Umetsu, Lekprichakul and Chakravorty[2003]). 稲作生産性が停滞しつつある点は, 同じアジア諸国の一員であるわが国においても例外ではないように思われる. とりわけ, 減反以降, わが国の稲作生産性が停滞しつつある点を指摘する既存研究が見られるようになってきた(新谷[1990], 速水・神門[2002], 近藤・山本[2003]). さらに, 生産性向上へのポテンシャルとも言える稲作技術知識ストックの限界生産力が 1970 年代後半から低下し, その後に急落しているとの指摘もある(伊藤[1992]). この点は, 稲作における研究開発投資の収益率低下と共に, 稲作において革新的な研究成果が乏しいことを示唆するとも言えよう.

本稿の課題は「わが国稲作生産性の伸びがゼロとなりつつある」という極めて悲観的な仮説を検証することにある. 具体的には input-oriented Malmquist TFP 指数を計測し, 減反以前と減反以降の生産性を比較することなどによって, この仮説の検証を試みた.